

サンタクロースの原像

本田和子

「サンタクロースって、ほんとうにいるんでしょうか？」こんな問い合わせが、子どもたちの口に上つたら、いま、私どもは、何と答えることが出来るでしょう？ もつとも、その問い合わせが、既に現代はなれしていく、最近の子どもたちは無縁のように思われるかも知れません。でも、それにもかかわらず、八十年前のアメリカで、ニューヨークに住む八歳の少女の質問を、ニューヨーク・サン紙の社説が取り上げ、誠実に、しかも心をこめて答えているという事実は、いまも、私どもの心を魅了するのではないですか。

社説は、「バージニア」と少女に呼びかけ、「おこたえします。サンタクロースなんていないんだという、あなたのお友だちは、

まちがっています」と、冒頭で明快に断言しながら筆を進めます。何故なら、目に見えるもの、手で触ることの出来るものしか信じないとしたら、その人の人生は限られた狭いものになってしまうでしょうし、何よりも「子どもじだいに世界にみちあふれている光も、きえてしまふ」に違いありません。「そうです、バージニア。サンタクロースがいるというのは、けつしてうそではありません。この世の中に、愛や人へのおもいやりや、まごころがあるのとおなじように、サンタクロースもたしかにいるのです。」恐らく、サンタクロースを、肉眼でとらえた人はいないことでしょう。でも、それが、サンタクロースがない、という証明になるでしょうか。不可視の世界を覆うている幕は強大で、人間の

力でそれを引き裂くことは難かしいのですが、それでも、私どもには、幕の向こうをかいしま見る幸せが与えられています。「信頼と想像力と詩と愛とロマンスだけが、そのカーテンをいつときひきのけて、まくのむこうの、たとえようもなくうつくしく、かがやかしいものを、みせてくれるのです」から。

少女への答えは、こうして、五官を超えた世界を透視する道を示しながら、サンタクロースの不滅性と子どもの心の普遍性を謳歌して結ばれています。「千年のちまでも、百万年のちまでも、サンタクロースは、子どもたちの心を、いまとかわらず、よろこばせてくれることでしょう。」と。



『サンタクロースっているで
しょうか?』表紙

ニューヨーク市の西九五番街でバージニアが手紙を書き、ニューヨーク・サン新聞社の編集室で、フランシス・チャーチという中年の記者が返事を書いたその日から、八十年という歳月が流れました。でも、この社説がそのまま翻訳されて、可愛らしい小型の本となり、昨年の暮れに発行されたとき、人々は、争つてそれを手にしたのです。一ヶ月の間に、五刷も版を重ねているのは、その何よりの証拠でしょう。私も、訳者の中村妙子さんからこの話を聞き、訳文を読んで頂いたとき、例えようのない想いで全身を一杯にしたことでした。

それは、こんなに温かく、しかも深いちえに満ちた世界が、人間にはあつたのだという確認でしょうか。同時に、自分の中に眠つていた「子ども時代の光」が、再び、かすかながら輝きを放ち始めたという喜びも混つていてようです。チャーチ記者が綴つてゐるように、子どものいない世界が考えられないとしたら、サンタクロースのいない世界もまた、想像する余地がないのです。この社説に触れたとき、私どもに感じられたときめきと、見えぬもののへの親しい想いは、八十年前の記者の予言が、適中したことを証しするものと言えないでしょうか。



『言うまでもなく、この場合、サンタクロースとは、西欧という特定の文化圏の、キリスト教という特定の宗教的慣習と結びついた、伝統行事の主人公を指すではありません。より普遍的なもの、つまり、始原の想像力の象徴としてのサンタクロースを意味しています。それは、待ち望む心に必ずもたらされる確かな約束です。よき訪れを携え、彼方から風のように現われて東の間の祝祭性を顕現し、再び、風のよう而去つて行く旅人の幻、それが、たまたま、歐米の子どもたちには、サンタクロースの映像でとらえられていた、と言うことなのです。

サンタクロースは、日常世界の住人ではなく、非日常の世界から、霧と氷に閉ざされた国境を越えて、ある一日だけ、この世界に姿を見せるお客様です。雪原に鳴り響くトナカイぞりの鈴の音は、邪靈の集う凶々しい場所である辺境を、無事に通過するための悪魔払いの鈴の音とも言えるでしょうか。

クリスマスだからサンタクロースが来るのではなく、サンタクロースの訪れが、クリスマスを出現させます。少くとも、子どもたちにとつては、この感じ方が真実であるでしょう。見慣れた日

常的現実は、一夜明けると影を潜め、降誕祭という聖なる時間の下に、すべての人が、歌い、美味に酔う、そして贈り物で充満した、祝祭空間が出現するのです。雪原を疾駆してくるサンタクロースは、非日常世界の導師として、この世界を瞬間に聖化し、非日常的時空間を出現させる役割を負うているのでしょうか。

こう見てみると、サンタクロースには、季節ごとに来臨して豊饒を約束するまれびとの神の面影が重なってきます。サンタクロースの起源は、一般に、聖ニコラスという四世紀の司教に求められています。でも、その原像は、特定の伝説上の人物に帰されることは、余りにも普遍的すぎるようです。より深く、より根源的な根があるので……。日常世界を瞬時に変貌させる來訪神と、それによって出現する祝祭的時空間を、人間は、常に必要としてきたのですから。

文明の進展の中で、過剰なまでの合理精神に人間が支配されるようになるにつれ、これらの幻は、人々に見えにくくなつてきました。そこで、これらを受け継ぎ、守り伝えるべく浮上したのが、芸能の分野と、他ならぬ子どもの世界だったのです。芸術家と子どもたち、彼らはいすれも始原の想像力を具現する存在です。原質的なイメージのない手としては、まことに、ふさわしかつたと言えましょう。

「三番叟」の踊りや、或いは能の「翁」のように昇華された姿の中に、まれびとの老人神の芸能化を見るとしたら、「お正月さん、早く来」と子どもらに歌われる御歳神や、大きな袋を背負って、

ニコニコと来訪する昔語りの福の神の姿には、その子ども化が見られるのではないでしょか。そして、サンタクロースもまた、それら幸せをもたらす老人神の一つの現われと見ることが出来そうです。



狂言や民俗芸能の翁の像は、能の取り澄ました「翁」とは異なつて、ユーモラスで、道化的な要素が強いようです。もともと、来訪するまれびと神は、日常性の対極に位置づくと言う点で、ト リックスター性を持つてゐるわけで、人の思わくを超える動きを見せるのが当然かもしれません。その意味では、道化と共に通ずると言ふことになりましょか。

ところで、サンタクロースの中にも、慈愛に満ちた温厚な老人ばかりではなく、遊び好きで文句やで、しかも美食家という、常識的なサンタ像をひっくり返して見せるものがあります。例えば、レイモンド・ブリッグズの描く『さむがりやのサンタ』がそ

れでしょう。ここで、一寸だけ、この異端的サンタ像をのぞいて見ることに致しましょう。

サンタクロースが働くのは、一年の間に十二月二十四日の夜、たった一晩だけ。ですが、寒がりやで文句の多いサンタ老人にとっては、頭痛の種子のようです。「やれやれまたクリスマスか」「おやおやゆきかい」「ふゆはいやだよまつたく」などと、次から

次へと不平タラタラ。毛糸のズボン下に毛糸のストッキング、部厚な毛糸のシャツを着こんで、それでなくともビール腹の肥満体は、もうころころです。それでも、一步外へ出ると「うーさむ」

卵を二つ落としたベーコンエッグとバタつきパン、それに熱い紅茶、たらふく朝食をつめこんで、ようようご出勤です。それでも、何と意地悪な天氣でしょう。吹きつける雪、次は冷い雨、暗い空を切り裂く稻妻、やがて厚い霧が世界をすっぽり覆つてしまします。サンタならずとも、陰々減々、ただひたすら、わが身の不運を歎きたくなろうと言うものです。それにしても、境界を越えるとは、何と大変なことでしょ。絵本は、見開きの両頁を、縦に四段に区切り、延々と境界越えの辛い旅を描いて見せています。

やつと人間界に到着しました。いよいよ、プレゼント配りが始まります。煙突の悪口を言つたり、屋根の上でお弁当を開いた

り、いかにもこのサンタ流の仕事ぶりなのですが、途中の家々で、ジュースやお茶のサービスがあつたりして、一寸ご機嫌。

番嬉しかったのは、「サンタのおじさんへ、ペペがごじゅうにどうぞって」と、メモの置いてあるコニャックのびんとの出会いです。

ふかぶかとソファーにどつかと坐りこんで、「けっこうけ

つこう」とグラス片手にご満悦。団子つ鼻が真赤になつていま

す。女王陛下の宮殿を最後に、プレゼント配りがやつと終りました。帰途につくサンタ老人は、うとうと夢見心地のよう。

サアこれからが、サンタのクリスマスです。熱いお風呂で体を温め、手作りの豪勢な御馳走に満腹し、ゆっくりと葉巻をふかして、さて、またベッドにもぐりこみ、のんびりと南国の夢でも見ることにしましよう。「ま、おまえさんもたのしいクリスマスをむかえるこつたね」と言うわけです。

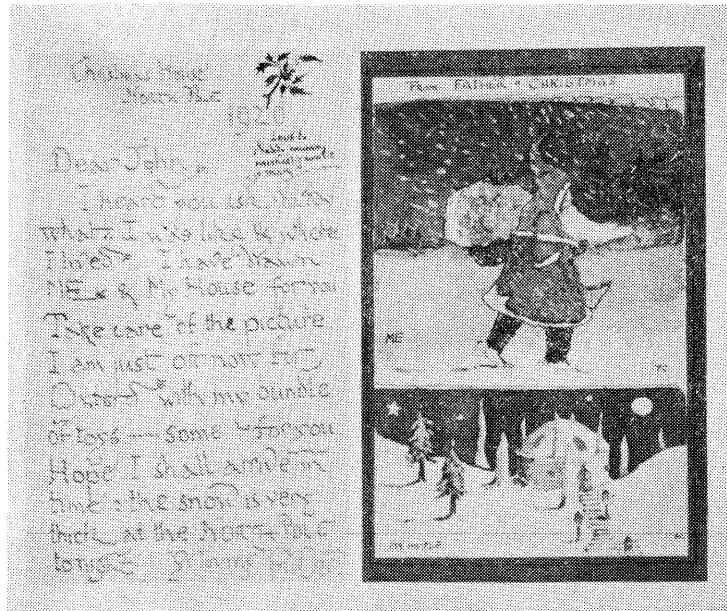
「さむがりやのサンタ」は、頭がつるつるで真白な顎髭、団子つ鼻でビール腹の老人でした。さながらシーエクスピア劇に登場するフォルスタッフのようです。サンタ像にも種々あるのですが、どうも、やせっぽちで若いサンタというものは見られないようですから、白い眉毛と白い髪の持ち主、つまり、老人であることだけは不可欠の条件なのでしょう。

ここに、「老人と子ども」の間に生まれる、利害を超えた強い結びつきを見ることが出来そうです。どちらも、現実的な世の中の周縁にいる存在です。それだけに、両者は、実際的な効にとらわれず、純粹に楽しむという共通地盤に立つて、深い出会いを体験し得るのかもしません。

ところで、ここに、老人ではありませんが、サンタクロースを媒介にして、子どもたちと深く熱い共感を抱き合つた一人の大人がいます。オックスフォード大学の中世英語学の教授、J・R・R・トールキンと言えば、『ホビットの冒險』でおなじみのファ

絵本に大喜びするのは、狂言の翁の滑稽な演技に大笑いするのと、どこか共通ではないでしょうか。

◀『サンタ・クロースからの手紙』より



ンタジエ作家でもあります。その彼が、息子たちに向けて、約二十年間、送り続けたのが『サンタ・クロースからの手紙』でした。絵本の形にまとめられたその書翰集に接したとき、私は、その内容にもまして、「ステキな父子」の存在に胸を打たれました。サンタを信じていてる息子のために、北極圏のサンタから毎年届くクリスマス・レター。それが、二十年の長期にわたって、父子に共有された秘密の世界でした。二十年経てば、三歳の幼児も大人になります。にもかかわらず、彼らは、この「サンタからの手紙ごっこ」を止めなかつたのです。それを演じ続けることで、この父子は、日常的な彼らの関係に聖なる光を当て、非日常的なヒエロファニー的瞬間を顕現させていたのかもしれません。トールキン自筆のサンタ像は、そのため、毎年、トナカイぞりを駆つて、長い旅をくり返していたのでした。

『サンタ・クロースって、いるんでしょうか?』 東村妙子 著
『さむがりやのサンタ』 レイモンド・ブリッグズ 作、絵
すがわらひろくに 訳

『サンタ・クロースからの手紙』 ベイリー・トールキン 編
瀬田貞一 訳 評論社